

■ ^{ほんこぎねむらさきいとすがはおどしほらまき}本小札紫系素懸威腹巻 (戦国時代)

高さ 65.0 cm 幅 40.0 cm

北条氏康の四男、北条氏規を家祖とする狭山藩主北条家に伝来した腹巻で、腰絞りの中世的形態を示し使用痕も見られる実戦的甲冑である。

胴の^{またたてあげ}前立拵・^{うしろたてあげ}後立拵はともに二段、^{うじのり}長側を四段とし、^{なががわ}胸板・^{むないた}脇板や^{わきいた}装飾である^{とんきん}鍍金仕上の金物等にみられる造形、そして、革を重ね合わせた^{わたがみ}肩^{かた}上としているところに、室町時代から戦国時代の特徴が顕著にみられる。

内側を^{しほがわ}皺革で段ごとに包み、^{ほんこぎね}本小札であるにもかかわらず^{おどしげ}威毛を^{すがはおどし}素懸威とすること。また、胸板などの金具廻と肩^{かた}上、^{ぎょうよう}杏葉の表面を黒漆塗りの鮫皮貼りにする点、小札が幾分長めに作られている点が特徴的である。

また、^{くさずり}草摺の裾の^{ひしぬい}菱縫・^{あぜめ}畦目を略す点などは桃山期的であり、戦国時代後半の制作と考えられる。

江戸時代末期頃に修復が行われた形跡もみられるが、「杏葉」も付属しているなど全体に保存状態が良い。



■ ^{けんぼんちゃくしよく}絹本著色 ^{ねほんず}涅槃図 (室町時代 15 世紀)

絹本著色 縦 163.9 cm 横 117.7 cm

署名・落款なし

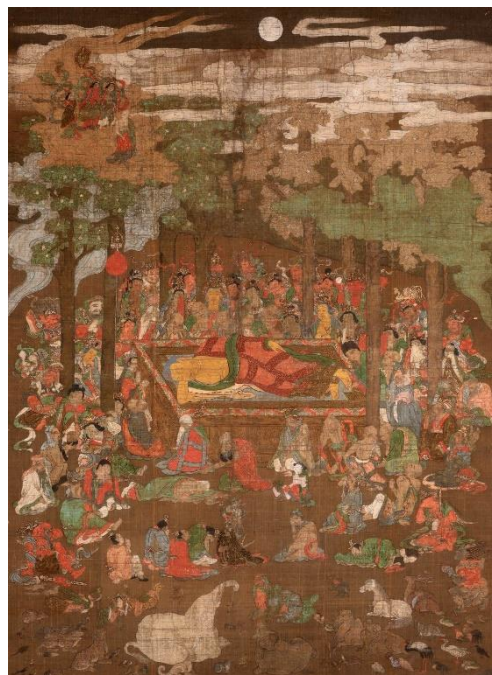
釈迦が入滅した時の様子を描いたもので、中央に寝台の上に横臥する釈迦を描き、寝台を囲むように、悲しむ菩薩や羅漢、明王、十大弟子、王侯、また生きとし生けるものとして動物や昆虫なども描いている。寝台の周囲には8本の沙羅双樹を、画面上部中央には月を、そして画面左上には^{まやふじん}摩耶夫人一行を描く。

釈迦が右手枕し、両膝を曲げて横臥し、寝台が左側面を見せる点は多くの中世以降の涅槃図に見られる共通の特徴である。

涅槃図は宗派を超えて作成され、釈迦の命日である2月15日の^{ねはんえ}涅槃会で使用された。作例は多いが、大きさは、涅槃図としては中程度のものである。

制作期は、^{びろうせん}描線が柔らかく湾曲する点、絹布が粗い点などによって、中世後期、室町時代と見られるが、前時代の南北朝時代の伝統的描法をよく踏襲した、格調のある作品である。

保存状況は、全体的に退色は見られるが、目立った破損や大きな修復の跡は見られず、状態はおおむね良好である。



■おだわらしきしょうぼう 小田原古式消防

江戸時代に遡る消防活動を由来とした鳶職に残る芸能である。「鳶職木遣」、「^{まとい}纏振り」、「^{はしご}階子乗り」で構成される。現在では主に小田原市消防出初式、小田原北條五代祭りで実演される。

「鳶職木遣」は、本来、材木を引き上げる際等に力を合わせるため歌った鳶職の仕事唄であるが、かつては祝儀、不祝儀などの儀礼唄としても歌われた。現在では出初式等の催事に歌われる。歌い手はキヤリシと呼び、上の句を歌うアニと下の句を歌うオトの2人に分かれる。そのほかの歌い手はカワと呼び、合いの手であるステヤリを歌う。昭和中頃の音源と現在とを比較すると、音の装飾が簡略化されていることが分かるほか、交流を持つ県内東部地域の団体が継承する曲名、曲調に類似性がみられる。

「纏振り」は、火事場で鳶を指揮するために振られたが、消防活動の目印であるため出初式に取り込まれたと考えられる。持ち手の下部にカギがあり、ここを右手で持ちスナップを使い回すことで、真ん中の帯状のバレンを開かせる。鳶職組合の若手で組織される若鳶会が担う。

「階子乗り」は、火災位置を確認することから生まれたとされる。階子乗りの技は大きく2種に分けられ、階子頭頂部の技・トウチョウゲと階子途中の技・トチュウゲがある。演者であるノリコは若鳶会が担うが、近年では若鳶会の所属人数が減り、若鳶以外の鳶職や一般人が参加する。

用具は、階級により柄が異なる半纏^{はんてん}、木遣を歌う際に持つサシボウ、纏、階子乗りの梯子（1月4日に作成する）、階子乗りに使うワッパ（縄輪）、梯子を支えるカギ（鳶口）がある。

公演は、毎年1月11日に行う小田原市消防出初式、毎年5月3日に行う小田原北條五代祭りなど。木遣に限っては、大雄山最乗寺、神奈川県鳶工業連合会研修会などで公演する。

練習は、北条五代祭り前の4月に「纏振り」と「鳶職木遣」を、神奈川県鳶工業連合会文化部研修会前の10月に「鳶職木遣」を2週間程松原神社境内の小屋で実施し、11月から12月に「階子乗り」を一か月程酒匂川河川敷で行う。

